

瑩山禪師の宗風管見

余 語 翠 巖

太祖瑩山禪師の「平常心是道」の話頭について日本洞上
聯燈録によれば、

一日聞^ニ通上堂^ニ平常心是道話^一豁然徹証、乃曰、我會
也、通曰、你作麼生會、師曰、黑漆崑崙夜裏走、通曰、
未^レ在更道、師曰、逢^レ茶喫^レ茶、逢^レ飯喫^レ飯、通笑曰、
子向後當^レ起^ニ洞上宗風^一、云々

とある。今茲に述べられてあるような史実について考えよ
うとするのではない。おそらく、諸種の史伝をまとめて右
のようなすがたになつたのであろうが、「平常心是道」の
話を契機として、瑩山禪師が徹通禪師に許されたことに於
て、疑はないようである。所で「平常心是道」の承当から
流れて行く方向を大まかに考えて、瑩山禪師の宗風をかい
ま見ようとするのである。他の史伝にあるように、「^ニ平常心是道話^一」とあつて之は南泉趙州の商量を^ニ平常心是道話^一とあつて之は南泉趙州の商量を^ニ平常心是道話^一

瑩山禪師の宗風管見（余語）

拈せられたのであろう。この話頭を「景德伝灯録」による
と、趙州從諗禪師の項に

問^ニ南泉^一、如何是道

南泉曰、平常心是道

師曰、還可^ニ趣向^一否、

南泉曰、擬^レ向即乖、

師曰、不^レ擬時如何知^ニ是道^一

南泉曰、

道不^レ屬^ニ知不知^一、知是妄覺、不知是
無記、若是真達^ニ不疑之道^一、猶如^ニ太

虛^一廓然虛豁豈可^ニ強是非^一耶

師言下悟^レ理。

とある。この「平常心」というのをどのように承当された
のであろうか、それが、黒漆崑崙夜裏走、の表詮となり、
逢^レ茶喫^レ茶、逢^レ飯喫^レ飯の具象化となると云う、承当であ

る。公式的表現によれば、平等即差別という風なことで足りるのである。そして、そのように説明されて来たことであろう。「平常心」とは、どのように読むのかと云うことが、宗門で一定しているとは思われない。屢々そう云う質問に逢い、布教する人々も戸迷いを感じておられるようである。「へいぜいしん」と云い、「へいじょうしん」と読み、「びようじょうしん」とうけとると云う風に、異っており、且又その説明についても、重に、我々の日常の我他彼此の揀択心がそのまま道にかなう様になされていく。詮じつめて見れば、それでもよいことであるが、少くとも、趙州と南泉、徹祖と太祖の商量から素直にうけとれるものはそうではないようである。趙州と南泉のやりとりから感ぜられるものはどこか中国風の味がある。三教一致と三教不一致と云う論もよく聞くことであるが、どんなものでも、全く不一致、全く一致というようなことはある筈がない。どこかで一致し、どこかで不一致であるにきまっている。ましてや、仏教の坐禪の思想が中国へ来た時に、すでにそこには中国風の風土があって、そこに移し植えられたものが中国風になることは自明である。「道」ということも、そのようなすがたで捉えられているように思う。

「莊子」應帝王篇に

南海之帝為儻、北海之帝為忽、中央之帝為混沌、
儻與忽相與遇於混沌之地、混沌待之甚善、儻與忽
謀報混沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息、此独
無有嘗試穿之、日穿一竅、七日而混沌死

とある。無限なる道というものは人間の認識の外にあるようである。儻と忽とはきわめて短い時間をいう。時間は空間と共に人間の認識の基本形式である。儻忽が混沌を自分達の場にひきおろした時にのっぺらぼうの混沌は死すという。無限者が無限たることをやめて有限になったことであらうか。由来「わかる」ということは、限りなきものに区切りをつけて、認識の形式にあてはめて「わかる」ということのようにである。それを群盲撫象と云い、一水四見と云う。その時に生々たる無限はその生命を失うのである。目鼻をつけて死せる混沌である。しかし、人はのっぺらぼうをのっぺらぼうのままにしておけない定めを有って生きているようである。そこに矛盾が生じて来て、限りなき問題があり、永遠の公案が横っているようである。背触とも非なる現実のすがたがある。南泉趙州の商量がそれを示している。丁寧な説明である。「道は知と不知とに属せず、

知は妄覚、不知は無記、若真達不疑之地、廓然虚豁」とある。道は人間の認識以外であり、意識に上っていること、「わかった」ことはあてにならない、「わからない」ことは無縁である。天地の道理というのは、言葉をかえて云えば道とは廓然虚豁と云う。従って、「平常心」とは、どのようにならぬか、本来的には「びようじようしん」と読むのが一番素直なようである。道ということが、人間の認識の外にあって、無限者を示すものであればそれは、絶対平等であり恒常不変のものだからである。かく云えばどてかく云えるようなものがあるのではない、之もどうも宿命的なことのようにあるが、人間はものの背後にものでないものを求めようとする癖があるようである。かくてそういうものを平常と云う、そういうものを心と云うことは仏教の常識である。このようにして本来的には、「びようじようしん」と云うべきではあるが、更に考を進めて見ると、「伝光録」首章、釈尊章に

我の與なる大地有情なり、與の我なるこれ瞿曇老漢にあらず、子細に点検し、子細に商量して我をあきらめ與を知るべし、たとい我をあきらめたりといふとも與をあきらめずんば、また一隻眼を失す、

瑩山禪師の宗風管見（余語）

とある。之は有名な釈尊の見明星悟道の拈提である。我與大地有情」とあるところである。無限者と有限者のかかり合い、それが與と云うことであろう。我の與なる大地有情なりとある。無限者が無限者のままであることは出来ない。無限者は有限者の上にあつてこそはじめて無限者たり得る。明々百草頭、明々祖師意である。「我の與なる大地有情なり」と云う表現は道元禪師の「悉有は仏性なり、悉有の一分を衆生と云う」と云われることと、その響の共通点が感ぜられるようである。このような響の上からは「平常心」はある時は「へいせいしん」であり、それと同じ意味の「へいじようしん」とも読まれてもよいようである。三通りの読み方をする時に、その背後の意味合いを考えて見たいものである。

さて又兩祖一貫の宗風の上に於て、かくの如き「道」へ到る道として坐禪がある。尤も第一義底に於ては少しも趣向すべきではなく、自己本在道中と云うことではあるが、いつも坐が表に出ているその功德について種々の説示のうち道元禪師弁道話の中に

このもろもろの当人の知覚に昏せざらしむことは静中の無造作にして直證をもてなり。

瑩山禪師の宗風管見（余語）

と示される。瑩山禪師は之をうけるように、「伝光録」釈尊章に、「我與大地有情同時成道」を拈提されて、

釈迦牟尼仏成道するとき、大地有情も成道す、ただ大地有情成道するのみにあらず、三世諸仏もみな成道す、恁麼なりといへども、釈迦牟尼仏において、成道のおもいをなすことなし。

とある。我の與なる大地有情と云われる。その我は、平常心でなければならぬ道理である。

およそ各祖師のことを伝えるに、その特異の家風、宗風を述べ勝ちなものであるが、思えば、特異ということは何を意味するのであろうか、特異なるが故に歴史の資料としての価値があるのであろうか、一回限りのもの、再び繰り返しのない事柄が歴史的価値として「特異」として特記すべきことであるならば、それは後の者にとって何の意味があるのであろうか、全く無意味という外はない。歴史的価値というのはあくまで、吾々にとつて環境の意味をもつものでなくてはならない。環境とは吾々をはぐみそだてるものなのである。一連の歴史的事実は軌跡のようなもので、方向を指し示してくれるものであるが故に価値ありとせねばならぬ。約して云えば「温故知新」と云うことでなければ

ばならぬ。瑩山禪師が了得された「平常心」は、かくの如くして禪門の中を流れ来つた禪門の了会の中のことである。かくて黒漆崑崙夜裡走と了会の表詮も、知と不知とに属せず、手脚つけ難きを思うことである。

更に逢^レ茶喫^レ茶、逢^レ飯喫^レ飯と云われてある。まこと天地の道理随順のすがたと云うべきであろう。南嶽懷讓が六祖に参問して、六祖より什麼物恁麼来の設問に対し、説似一物即不中と答えたとある（景德伝灯録）什麼物恁麼来の問には、「かくの如く」というより外云い様のないことである。云い様がないと云って、かくの如くと云う云い方は不安なのではない、かくの如くと云う大安心である。阿弥陀如来を不可思議光如来と云う、その不可思議というのは、安心の表白である。「かくの如く」と云う安心とそれは異なるものではない。瑩山禪師の拈提をきくと「伝光録」達磨章に「故曰大名不可思議一亦不可思議を名て法性といふ。」とある。平常心の説明とも思われる。そこには茶と飯とえらぶべき何ものもないことであつて見れば、聖凡迷悟を分たず、それはそれという風光であろうか。禪門の常用に将錯就錯という、それはそれという。普化和尚は伴狂して街頭に鈴を振って明頭来也明頭打、暗頭来也暗

頭打云々と云い云い日を過したと云う。之もそれはそれと云うことであろうか、逢^レ茶喫^レ茶逢^レ喫逢^レ飯と云うことも、それはそれと云うことであろうか。信心銘に「至道無難、唯嫌揀^レ択」と云う、唯嫌揀^レ択と云う消息、それは道元禪師の只管打坐に連り、瑩山禪師の喫飯のすがたを貫いて行く。それはそれと云うことであろうか。

およそ古人の徹証の消息にふれる時、人はそれを、言葉に表現することを避ける。禪は言端語端に渉るものではないという。人格とか体験とかと云うことを言語の外に考えているのであるが、言語も動作もすべて含めた大いなるものを考えるべきではないのか。何等かの意味に於て説明できる筈である。学問は客観的でなくてはならぬと云われる。至極至当な云分であるが、それが他人の言語の比較論及のみに終ることを意味するならば、それは自己の人格と何のかかわりもないことになる。茲にあえて、瑩山禪師の宗風をかいま見ようとしたことであるが、それが愚昧なものであっても、尚瑩山禪師の悲眼を、愚昧なるが故に感得することである。「甘え」であろうか。

瑩山禪師の「信心銘拈提」中「遣^レ有没^レ有、従^レ空背^レ空」のところに、風休花尚落、鳥啼山更幽　と頌せられて

瑩山禪師の宗風管見（余語）

ある。すべてを平等即差別、差別即平等で説明できるのである。すべからずが、禪師特有の表現にあらうと、その風流が一層さわやかに了会される。「我の與なる大地有情なり」と伝光録に在ったように、大地有情の壁立万仞の風情を鳥啼山更幽なりと示される。鳥が啼くことは山の静寂を破るすがである。されど鳥の啼き止んだ後、山の幽静は尚深まって行く。されば、鳥の啼くことは山の静寂の壮嚴、かざりである。僧趙州に問う、如何祖師西来意、趙州は、庭前柏樹子と、凡ての端的は庭前一本の柏樹子の上に万全である。それはそれとしての境涯に卓立している消息である。

かくの如くにして、趙州平常心是道の話が徹通禪師によりて拈せられ、黒漆崑崙夜裡走ると了会、更に逢^レ茶喫^レ茶、逢^レ飯喫^レ飯　と承当された話頭の方向を辿って、その宗風の一端を揮したことである。